

はじめに

兵ありといえども征戦なし。…略…新羅・百済、皆倭を以て大国にして珍物多しとなし、並びにこれを敬仰し、恒に通使・往来す。（「隋書倭国伝」）

開皇二十（600）年、隋を訪問した多利思北孤の使者は、文帝に対し自分たちの国は“非戦・平和外交を行い、近隣の国と友好的な関係を築いている”との報告をしています。『三国史記』においても、それまで繰り返されてきた倭兵の新羅への侵攻記事は炤知麻立干二十二（500）年四月の倭兵による長峯鎮攻略を最後になります。また「融天師彗星歌」『三国遺事』においても、新羅の真平王の時代（在位:579～632年）に日本兵が帰国したことが記されています。任那に出兵していた倭兵もこのころには本国に引き上げたものと考えられます。

日本側の文献には、継体紀に任那諸島の百済への割譲とそれに伴う内紛、そして任那回復への派兵の動きが記されていますが、推古十（602）年の来目軍2万5千の筑紫集結と渡海中止の記事を最後に軍事面からの任那回復の動きは完全になります。

大業三（607）年、日出処の天子からの国書を煬帝に届けた使者は“倭国は仏法の教えに基づいた国”であることを明言しています。十七条憲法には冒頭に”和を以て貴となす”と高らかに謳われています。

古田先生は1970年代初頭に、従来の『日本書紀』という答えから描かれていた日本古代史を、同時代史料（答えでなく、“根拠”）から見る、という古代史学のコペルニクス的転回による新しい歴史観を私たちに示し（注①）、その歴史解明の

方法により、1300年間隠され続けてきた「九州王朝」の存在を明らかにされました。そして多利思北孤は「九州王朝」の天子だったとされました（注②）。

それから50年が経過し、その間日本列島では各地で発掘が進み考古史料も飛躍的に増加しています。しかし残念ながらこれらの考古史料は、従来のまま「書紀」という答えに導くように解釈され、意味不明に解釈が横行し、日本古代の謎はますます深まっています。多利思北孤も消されようとしています。本稿においては、これら考古史料を正しい学問の方法で処理し、多利思北孤の国の姿を具体的に描いてみたいと思います。

<釈迦三尊像 図1>



(一) 激動する6世紀の東アジア

316年西晋の滅亡から約300年間、中国大陸は南北朝に分裂、さらにそれぞれ王朝も次々と交代し、激動・混乱の時代が続きました。そしてようやく589年に隋の文帝（楊堅）が南朝・陳を滅ぼし中国大陸の統一を果たします。そしてその矛先は朝鮮半島に向かいます。

朝鮮半島においては、それまで圧倒的な力を誇っていた高句麗に陰りが現れます。高句麗に領土を奪われ続けてきた百済は新羅と同盟を結び国力の回復に努め、聖王の時（551年）に高句麗から漢江流域の領土を回復します。また高句麗の傘下に甘んじていた新羅も百済軍と協調し北方へ軍を進め、支配地域を拡大していきます。

ところが新羅は真興王の時（555年）に百済を突如裏切り、百済が支配権を取り戻した漢江流域を自国領に編入し、中国王朝との直接接触のルートを確保します。これにより新羅の国力は急速に発展していきますが、それまで協力関係にあった百済・新羅の間に激しい亀裂がはいて、朝鮮半島の内部抗争はますます激化していきます。

5世紀には倭の五王のもと、朝鮮半島南部に展開していた倭国軍（注③）は、6世紀には本国に引き上げます。この時日本列島では何がおきていたのでしょうか、『日本書紀』には：

【北部九州において】

- ・筑紫国造磐井が“火（肥）、豊において反乱”を起こし、反乱の鎮圧に大和から援軍にかけつけた物部麁鹿火軍が、筑紫三井郡における戦いで磐井軍を破り反乱を鎮圧したことが記されています。
- ・肥後・豊前を拠点としていた磐井が倭国・九州王朝に対して反乱を起こし、北部九州にあった倭国中枢部を攻撃しようとした時、倭国は畿内から物部の援軍を呼び寄せ、太宰府の南でこれを撃破したものと考えられます。
- ・岩戸山古墳周辺からの出土物から、肥後勢力が筑紫に進出しようとしていたことが読み取れます（注④）。

【畿内でも】

- ・神功・応神から続いてきた河内王朝が武烈の時に滅亡、北陸から侵入してきた継体軍も、大和の攻略に手間取り、即位後20年間北河内、南山背を転々としていたことが記され、畿内は内乱状態が続いていたようです。
- ・このころ飛鳥では、朝鮮半島から引き揚げてきた渡来人がそれまで不毛であった土地を当時の先端技術でもって開発を進め、彼らを束ねる蘇我氏が奈良盆地で抜きん出た勢力をもつようになってきます（注⑤）。

6世紀は中国本土だけでなく、朝鮮半島また日本列島も激動に見舞われていました。そして倭国においては多利思北孤がこの混乱を乗り越えて、法興元（591）年に王座につき、新しい時代を歩みだしたと思われまます。

多利思北孤の都はどこにあったのでしょうか、隋書大業四（609）年の記事から見て
いきたいと思います。（倭国の都の名称：本稿では太宰府＝倭京とします）

（二）日出処の天子の首都（倭京）

1）隋書倭国伝の構成

隋書倭国伝には下記内容が記されています。

① 冒頭部分

・歴代の中国正史などに記された倭国の地理的位置が記され、魏から齊、梁まで代々中国とたがいに通じた国であることが述べられています。

② 開皇二十（600）年の倭国使者の文帝への報告

・倭王の名前は“阿每・多利思北孤”妻は“鷄彌”と呼ぶこと、さらに倭国の官位、行政、軍事、裁判制度、仏教の導入、近隣諸国との関係、また風俗、気候風土、そして阿蘇山があることなどが詳しく述べられています。

③ 大業三（607）年、多利思北孤の煬帝への使者派遣

・日出処の天子書を日没する処の天子に致す恙なきや。有名な国書が提出されます。

④ 大業四（608）年、煬帝が裴世清を倭国に派遣。

・百済を渡り・竹斯国に至る。東に秦王国に至る、十余国をへて海岸に達す。
・竹斯国から以東は、みな倭に附庸する。
・小徳阿鞞台以下数百人が裴世清一行の到着を迎え、10日後大禮哥多毗以下二百餘騎が郊外まで出むき都に迎える。裴世清は倭王に謁見し、煬帝の意向を宣諭。
・倭王は宴会を開いて饗応し、裴清世を送り返した。この時倭の使者を従わせ、隋朝に倭の産物を貢納した。

2）隋使の通った道

隋の使者は壱岐までは魏使とほぼ同じ行路をたどり、その後右図のように東松浦半島に寄らず直接博多湾岸に上陸、瀬戸内海までの国々を記しています。

- ① 一支より竹斯に至る。
- ② 東、秦王国に至る。
- ③ 十余国をへて海岸に至る。
- ④ 隋使到着の報に接した倭王は出迎えに高官を博多湾岸に派遣、10日後に使者を都（太宰府）に迎えます。

＜神籠石山城群に守られた太宰府 図2＞



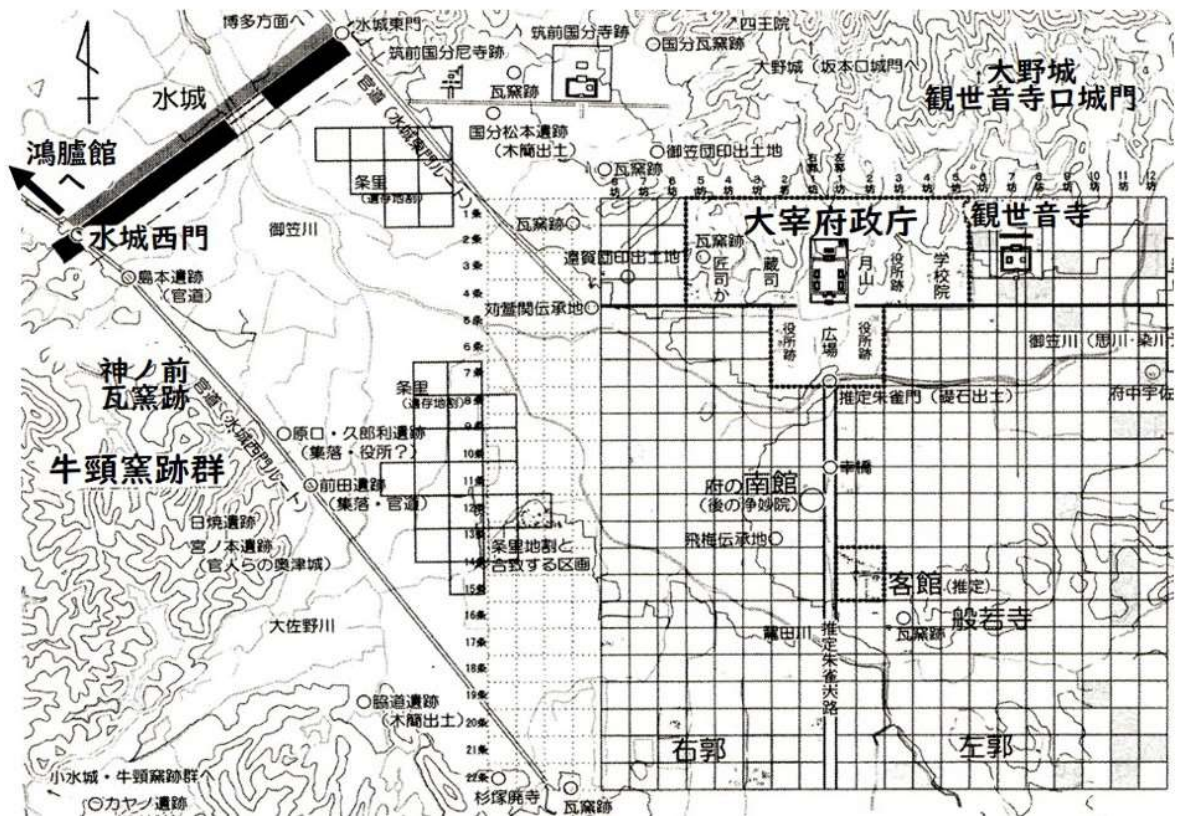
3) 隋使の到着地と宮都の位置関係

古代の博多湾岸には草香江と冷泉津の二つの入り江が存在し（博多古図）そこには外交使節を迎える鴻臚館が建てられていました。現在「難波池」として難波地名が残されているところの近くです。博多湾に着いた隋使はここで倭国高官の迎えをうけ、10日後に二百余の騎馬兵に守られ、約12km南東にある大宰府に向かいます。そこには幅10mの古代の官道（直線）が通っていました。

＜隋使の到着地：博多湾岸の古地図 図3＞



＜太宰府の条坊と主要な遺構 図4＞



倭京（太宰府）では多利思北孤が隋使“裴世清”を迎え手厚い接待を行います。太宰府政庁跡には天子の宮殿を示す「紫宸殿」「内裏」の地名が残っています。また正殿から南に延びる幅約36mの直線道路は今も朱雀大路と呼ばれています。

【問題点】

太宰府から3期にわたる遺構が出土し、最下層のⅠ期(掘立柱式建物)は、通説では7世紀後半の造営とされ、多利思北孤の時代には存在しなかったことになっています。

太宰府の本当の造営年はいつか、次に見ていきたいと思えます。

(三) 太宰府(倭京)の造営年代について

1) 7世紀中頃造営説の根拠(通説)

<太宰府政庁Ⅰ～Ⅲ期の造営年代(表1)>

政庁	造営時期	建物	発掘調査
Ⅰ期	7世紀後半	掘立柱	未調査に近い
Ⅱ期	8世紀初頭	礎石式	調査実施
Ⅲ期	941年純友の乱から再建12世紀まで存続		

条坊:7世紀後半にⅠ期政庁と同時にできた可能性がある

上記のように九州の考古学者は、太宰府政庁は白村江戦以降に作られたもので、“多利思北孤の時代に太宰府は存在していなかった”と考えています。しかし、**その根拠とするものは、『日本書紀』の記述によるもので、この年代は下記のように最近の科学的年代測定法による結果と合わなくなっています。**

(表2)

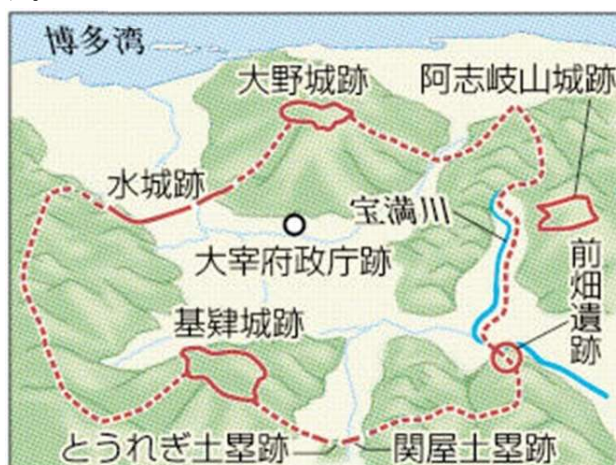
大宰府造営年を推定する記事		科学的測定結果
イ)天智三(664)年	筑紫に水城を築く。(書紀)	三・五世紀代の造営(注③) (敷粗朶の炭素年代)
ロ)天智四(665)年	大野城と基肆城を築く。(書紀)	五・六世紀代の造営(注⑥) (地層に含まれた炭化物の炭素年代)
	大野城大宰府口城門の木柱⇒	648年伐採(注⑦) (年輪年代法)
ハ)和銅二(709)年	観世音寺は天智が斉明のため 建立始めるも未完(続紀)	← (次頁”表3”参照)
ニ)白鳳(661~683)年	観世音寺の創建(二中歴)	

通説は、太宰府造営に関する記事がどの文献にも記されていないので、「書紀」に初めて登場する水城・山城の造営記事を根拠に、“太宰府は白村江戦が終わってから、まず防衛施設が作られ、その後に宮殿・官庁・条坊が作られた”とのストーリーを作り上げたにすぎないのです。

太宰府の防衛網は広域には図2に示したように筑紫全体を取り囲んだもので、直接の防衛のためには大野城・基肆城だけでなく、東方に「阿志岐城」(書紀に記載なし)が築かれています。この城は大野・基肆城のような最新の積石式山城ではなくて、旧来からの神籠石山城(切石式)方式で作られています。

<大宰府周辺の防衛網 図5>

これらの山城の配置・炭素年代から、太宰府の地はすでに、五世紀の倭の五王時代には倭国の首都として機能し、その防衛に水城・山城群が築かれていたことがわかります。そして朝鮮での戦雲が急を告げた7世紀中頃に、博多湾・有明海方面からの攻撃に備えて、水城、大野・基肆城の強化が図られ、それらの工事が書紀記事に反映されたと考えられます。



2) 観世音寺の創建時期について

それでは、太宰府Ⅰ期政庁はいつ作られたのでしょうか。Ⅰ期政庁と同時に作られたと考えられる観世音寺について、いままで各方面において詳しい検討がなされているので、まずは観世音寺の創建時期から見ていきたいと思えます。

＜観世音寺建設に関する文献（表3）＞

出典名	成立	記事
続日本紀	797年	天智の晩年(670年頃)観世音寺造営始まる(第三項表2-ハ)。
二中歴 勝山記	平安末 室町時代	白鳳(661～683)年間、観世音寺東院造。 白鳳十(670)年鎮西観世音寺造。
続日本紀 〃	797年	大宝元(701)年8月条。観世音寺の食封を停止する。 天平十七(745)年11月条。僧玄昉を観世音寺造営にあてる。
元亨釈書	鎌倉時代	天平十八(746)年条。観世音寺完成。

観世音寺創建問題を詳しく研究されている大越邦生氏は、「延喜五年観世音寺資材帳」と九州歴史資料館の発掘報告書を比較検討し、観世音寺もⅠ期・Ⅱ期の遺構が存在し、“Ⅱ期遺構は「資材帳」の記述と合致するが、Ⅰ期遺構の「資材帳」は存在しない。それが消滅したときに破棄された”のだろうとしています(注⑧)。

＜観世音寺の“塔・金堂・講堂”遺構（表4）＞

遺構	状況
Ⅰ期	Ⅰ期に關係する文献史料は存在しない。
Ⅱ期	遺構は現存する『観世音寺資材帳』に一致する。

(金堂跡は5期まで確認されています)

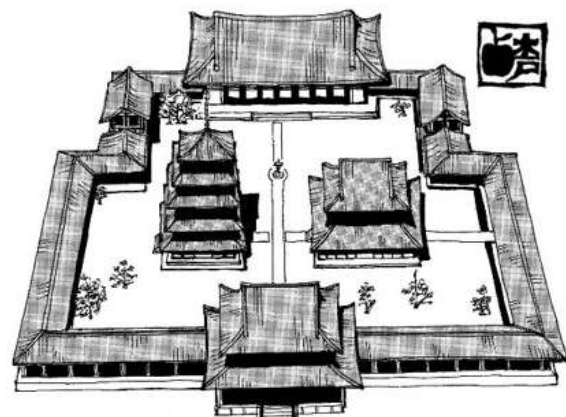
そして、Ⅰ期観世音寺の創建については、(Ⅰ)“勝山記”などに記す670年”か、(Ⅱ)白村江戦以前か、の二つの仮説が存在するが、氏は(Ⅱ)の仮説を選びたい、その時期は「二中歴」の“倭京年間(618～622)の創建”との見解を述べられています。ただしⅠ期寺院の法隆寺への移築説は否定し、その消滅の経緯は不明としています。

それでは、Ⅰ期観世音寺は何時作られて、どのような経緯で太宰府から消えてしまったのか、現在の「古田史学」では否定されている“法隆寺の観世音寺移築説”をもう一度見直してみようと思えます。

3) 法隆寺の“観世音寺からの移築”説

奈良・斑鳩の地に建てられた法隆寺の創建については明治～昭和と続いた「再建・非再建論争」は昭和15年の若草伽藍の出土により、再建論に軍配があがりました。しかし現存する法隆寺の典型的な飛鳥様式の建物(右図)、そして心柱伐採が594年と判明した五重塔、また釈迦三尊像や多くの仏像がどこで作られたのか、又どのような経緯で法隆寺にあるのか、大きな謎が残されました。

＜法隆寺伽藍 図6＞



この問いかけに米田良三氏が『法隆寺は移築された』（注⑨）において“観世音寺からの移築説”を発表され、2004年4月の多元的古代研究会・関東の創立10周年記念シンポジウムにおいてこのテーマが取り上げられました。

＜シンポジウム参加者の見解（表5）＞

氏名	所属	移築元
米田良三	建築家	観世音寺
川端俊一郎	北海学園大学	筑後・八女
古賀達也	古田史学の会	筑後国府近辺
飯田満磨	//（建築士）	観世音寺
大越邦生	東京古田会	播磨の寺院

米田氏の建築家の目から見た“法隆寺の観世音寺からの移築説”に対して、

- イ) 川原寺の同範瓦が観世音寺から出土している。このことから、観世音寺は法隆寺より川原寺（7世紀後半建立）との関係が考えられる。
- ロ) 観世音寺境内に残された塔心礎の径（0.9m）に対し、法隆寺五重塔心柱の径（0.8m）は小さすぎる。
- ハ) 法隆寺釈迦三尊像には「法興」年号が記されている。法隆寺移築元の寺名は「法興寺」で、その寺は高良山の麓にあった。
- ニ) 「二中歴」「勝山記」「日本皇帝年代記」など九州王朝系史料に記されている、「白鳳十（670）年 観世音寺造」は史料として信憑性がある。
- ホ) 米田氏が論拠とする観世音寺絵図はI期観世音寺のものでない。

との説がパネラーから述べられました（注⑩）。

この頃、古田・福永・古賀氏等による「筑後遷都説」が「古田史学」では大きく取り上げられていたので、“法隆寺の移築元は太宰府ではなく、筑後であった”とする説が多くのシンポジウム参加者に受け入れられたのではと推定しています。

その後も“「二中歴細注記事」は九州王朝系史料に基づく（注⑪）”とする説が難波宮副都説の補強材料として使われる、など現在では“「二中歴」系史料に基づく、観世音寺＝670年創建説”が「古田史学」の定説になっている感があります。

はたして多元シンポジウムで“観世音寺からの移築説”を否定する根拠とされたものは正しいのでしょうか。その後、観世音寺出土の瓦と五重塔心柱の径問題、そして観世音寺境内の礎礎について、下記「古田史学の会」会員から新情報が報告されています。

イ) 観世音寺と川原寺の瓦は同じものか？（伊東義影、古田史学の会。注⑫）

奈良文化財研究所（奈文研）を水野孝夫氏（当時の古田史学会代表）と訪問して実見したところ、観世音寺創建瓦（老司I式・275A型式）と観世音寺出土の265型式瓦（「川原寺創建瓦（C類Ⅲ型）」の同範瓦とされる）は同じ型ではないことに気が付いた。そして同調査部に、“川原寺創建瓦と同範瓦とされる観世音寺265型式の瓦”について聞いたところ；

- ① 観世音寺の265型式瓦は老司I式（275A）と同範でもなければ同じ型でもない別のものである。
- ② 265型式瓦は講堂・金堂・塔遺構に伴って出土したものではなく、小子房（僧房）推定地の北側の落ち込んだところから一点のみの出土で、“いつ・誰が・何の目的”で持ち込んだのかわからない。

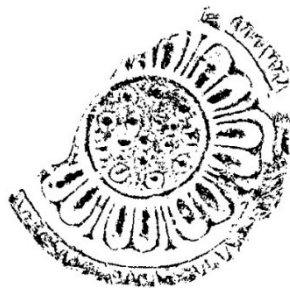
ことが判明した。“川原寺出土の瓦と同範と称される瓦（265型式）は観世音寺の創建時期を探る遺物資料として不適当なもの”だったのです。

九州歴史資料館からも奈文研と同様の説明（下記）が報告されています（注⑬）。

265型式 (Fig.20, PL.1) : 推定小子房跡の調査（70次）において、北側の落ち込み中位の、泥炭質土壌から伏せた状態で、単品で検出され、遺構に伴った出土状態ではない。

既に概報その他で報告されているように、奈良弘福寺（川原寺）の創建瓦と同範関係にあるとされ、観世音寺創建瓦275A（老司式）のモデルになった可能性があるとして指摘する研究者もいる（高倉1983）。265は川原寺創建瓦がA～D類に分類されているうちのC類Ⅲに同範の可能性があると考えられる。

265型式が観世音寺から発見されたことについては、川原寺創建瓦の年代からして、観世音寺の建立に関与して瓦工人・瓦等の動向が十分考えられる。両者共に天智天皇ゆかりの寺院であり、その背景には大宰府政庁第Ⅱ期建立に際し、中央との密接な交流があったであろうし、現に朱鳥元年（686）には川原寺の伎樂が筑紫に運ばれており、和銅2年（709）に造営開始の督促の詔が出されるに至っている。ただ、この川原寺C類Ⅲが老司式瓦のモデルになったかについては、推論の域を出ない。



265型式瓦



275A型式瓦老司I式

（出典：「観世音寺－遺物編1。31,32頁」九州歴史資料館）

< 大下見解 >

これは、一研究者の推論を、事実関係を検証せずに、“それを考古史料根拠として、仮説を積み上げていく”典型的な事例です。

伊東義影、飯田満麿、水野孝夫氏は奈良県在住の会員で、よく3人で古田先生と共に奈良の遺跡調査に行かれていました。古田先生の教え

他人の言うことを鵜呑みにせず、疑問があれば自分で検証しなさい

を实践されたものと思います。

ロ) 五重塔心柱径はどこを計測したものか？ (飯田満磨、元古田史学会副代表 注⑭)

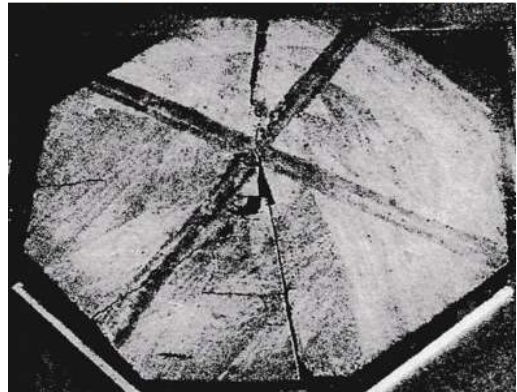
「法隆寺国宝保存工事報告書・五重塔」の心柱詳細図を精査したところ、

- ・柱断面図には“心柱は根本で八角平行面間隔二尺七寸(818mm)とある。これが心柱の公称寸法820mmとされているものである(平行面間の距離)。
- ・これを八角対角寸法に三角関数で算出すると、その計算結果は888mmとなる(八角の先端部分の距離)。

これは観世音寺境内に残されている心礎(900mm)にぴったりと収まる。この礎石は

“法隆寺五重塔の心柱のために柱穴を彫り込んだもの”と断定することが出来る。

<法隆寺五重塔心柱断面 図7>



【観世音寺境内の碾磑は推古十八(611)年の伝来】

2012～13年に「古田史学の会」において“副都説論争”が行われた時、観世音寺の創建年代についての下記討論がなされています(注⑮)。

- ① 正木裕：天智九(670)年歳条の“水碓を作り冶鉄す”は、“白鳳十(670)年に観世音寺作る”を裏付ける記事である。水碓は碾磑のことであり、観世音寺境内の碾磑は天智紀にある水碓のことである(会報110号)。
- ② 大下隆司：碾磑は“臼(挽くもの)”，水碓は“碓(舂くもの)”で、天智紀の水碓は水力を利用して碓を動かし、鉄鉱石を破碎する機械である。

観世音寺の碾磑は7世紀初頭に高句麗からもたらされたと考えられます

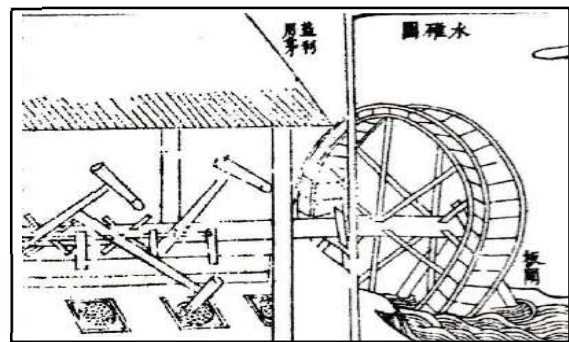
正木説は成立しません。

<観世音寺境内に置かれた碾磑 図8>



径約1mの石臼。重さ約400kg

<『天工開物』の水碓 図9>



これらの新しい情報から、“観世音寺からの移設説を否定”する根拠はなくなったことがわかります。

ハ) 筑後の寺院から移転説

シンポジウムから20年が経ちました。筑後からは原法隆寺に相当する寺院遺構は発見されず、「九州王朝の筑後遷都説」否定の検証結果が去年の古代史セミナーで報告されています(注④)。“筑後からの移転説も成り立たない”ことがわかります。

次に「二中歴細注」は九州王朝系史料」との見解について検証します。

二)「二中歴細注」の史料性格について

右図は「二中歴・年代歴」の九州年号の最後の部分です。「二中歴」とは平安時代末に官僚が事務作業を進める上必要な情報を「掌中歴」「懷中歴」としてまとめたものを、鎌倉時代に「二中歴」として一冊にしたものです。

その内容は下記項目に分かれて構成されています。

- 第一：神代 人代 后宮 女院 公卿 侍中
- 第二：年代 儒職 官局 都督 廷尉 循吏 酷吏 諸司 祭主
- 第三：仏聖 大仏 造仏 教法 仏具 法用 祖師
- 第四：僧職 座主 僧数 法場
- 第五：乾象 方隅 八卦 属星 歳時 年齒 行年 閏月 日計
- 第六：坤儀 関路 諸国 請印
- 第七：官職 官名 叙位 除目 年官 公文 計
- 第八：儀式 礼儀 勅使 供膳 産所 宝貨 畜産 刑法 鑑誠
- 第九：医方 呪術 怪異 種族 姓尸 名字
- 第十：京兆 宮城 隣閭 名家 当任 諸国
- 第十一：経史 倭書
- 第十二：詩人 登省 倭歌 詩草 切韻 書詩 書体 詠言
- 第十三：芸能 一能 博棋 名人 名物 十列

<「二中歴」 図10>



要するに、平安時代末から鎌倉時代の頃の朝廷実務に必要な情報を簡易事典のような形にまとめたものです。この中に大宝元年以前の年号が含まれていますが、これはイエズス会宣教師のロドリゲスが証言しているように、当時の書物にはこれら年号が記され、また「如是院年代記」など僧侶たちによって研究もされていたので、簡易事典に情報として取り入れたものと思われます。そして、そこに付された細注は、事典の編者が当時（平安末～鎌倉）彼らが入手していた情報を付したものと思われます。例えば、大化・白鳳年のところに下記細注が付けられています。

- ・大化＝「皇極4年は大化元年と為す」。
- ・白鳳年間（661～684年）＝「対馬の銀を採る」。

これらは、確実に『日本書紀』の記事に基づいたものです。そして、細注の多くには仏教関係の出来事が記されています。これらは、当時の朝廷が把握していた神社の伝承・由緒、また仏典に基づくものと考えられます。

【細注は九州王朝系史料か】

これに対して「細注記事は九州王朝系史料」という見解を基に；

- ・太宰府の観世音寺は670年に建てられた（白鳳年間記事）。
- ・大阪四天王寺の名は実は「天王寺」で、九州王朝が建立した寺である（倭京二年）。

とする説がたてられています。それぞれについて見ていきたいと思ひます。

① 白鳳年間「観世音寺東院造」記事

「二中歴」白鳳年間記事や戦国時代に作られた「勝山記」をもとに“九州王朝が建立した観世音寺の創建は670年”との説が展開されています（注⑩）。

しかしこの細注は「二中歴」の編者が「白鳳時代に相当する年」に起きた出来事として『続日本紀』元明天皇の“天智の晩年（670年頃）に観世音寺造営が始まる”の記事を基に記した、と理解するのが自然と考えます。

そして創建観世音寺がどの時代に建てられたかは次の手順で明らかにすることが必要です：

- 1) 発掘報告書を精査し、その寺院が建てられた時期を確認する。
- 2) 次に文献史料に該当する記事を見つけて、建立された正確な時代を把握する。その場合、その文献のきっちりとした「史料批判」をする必要があります。

<大下見解>

「二中歴細注」を九州王朝系史料とするなら、その根拠を明示することが必要です。その説明のない「観世音寺＝670年創建説」は、“根拠のない史料を基に遺構の年代を判定している”こととなります。

創建観世音寺（I期遺構）の年代を「二中歴細注」に求めることは本末転倒です

② 倭京二(619)年「難波天王寺聖徳建」（「二中歴」記事）

上町台地に現存する四天王寺についても、「二中歴・倭京二年記事」を史料根拠として、これは九州王朝建立の寺院であり、寺の名前は最初から「天王寺」だったとされています（注⑪）。そして下記説明がなされています。

- 1) **前期難波宮が“九州王朝副都であるから”、摂津は九州王朝の直轄支配地だった。** ここには九州王朝の有力寺院が建てられていた可能性がある。
- 2) 「二中歴」は“九州王朝内部の記事だから”、この寺が筑紫難波に建てられたものなら単に「天王寺」を建てたと記せばよい。「難波」は不要である。あえて「難波天王寺」と書いたのは、九州王朝が摂津難波に天王寺を建てたことを明記するためである。
- 3) 考古学的に見ても天王寺の創建瓦は7世紀初頭の頃とされているので、“考古学知見からも、この寺の名称は『日本書紀』の四天王寺より『二中歴』の天王寺が正しい”という結論を導き出すことができる。

【事実関係】

『日本書紀』には“厩戸皇子の発願で、物部戦を勝利に導いてくれた四天王へのお礼のために「四天王寺」が建立された”と記されています。当初、四天王寺には四天王像が祀られていたことが確認されています（注⑫）。また8世紀初頭に作られた『上宮聖徳法王帝説』はじめ、奈良時代にできた法隆寺系文書、また平安貴族の日記などにも「四天王寺」の名が記されています。これらの事実を無視してはいけません。

その後、9世紀後半に四天王寺は真言宗の傘下に入り、真言寺院から別当が派遣され、本尊も救世観音に代わっています。この時、寺院の正式名称は由緒ある「四天王寺」が継続して使われたが、庶民は自分たちを救ってくれるのは四天王ではなく、救世観音であることをはっきりと認識していたので、親しみをこめて「難波の天王寺さん」と呼んだものと思われまゝ。謡曲「弱法師」は同じ寺のことを「四天王寺」「天王寺」と二つの名前で語っています。

また寺院の性格も鎌倉時代に作られた「しんとく丸」『説教節』によると、それまでの「護国寺」という性格から庶民のため、特に貧民救済の寺という形に大きく変わっています。いまも大阪では、地名を「天王寺区」とし、寺院名は「四天王寺」と呼んでいます。市民はとくに区別なく二つの名前を使っています。

鎌倉時代の「二中歴」の編者にとって、その寺院の名前は当時広く流布していた「天王寺」名を採用して「二中歴細注」に付したものと考えられます。

また四天王寺の“玉造創建・7世紀初頭の荒陵移転説”も広く語られています。

<大下見解>

②-1) の「難波宮副都説」もまだ仮説の段階にあります(注⑱)、この仮説をベースに仮説を展開することは「仮説の重層」となり、古田先生がきつく戒められた手法です(注⑳)。

< “二中歴細注”は九州王朝系史料”について—大下見解>

- ・「二中歴」にある古年号は、当時の文献に記載されたものですが、細注が九州王朝系文書に記されていたことを示す史料は一点も存在しません。むしろ細注は『日本書紀』の影響のもとに書かれていることが読み取れます。
- ・「二中歴細注」を九州王朝系史料“とする根拠(出典)も明示されていません。
- ・また「二中歴」そのものも、金石文でその存在が確認されている「法興」が含まれていません。これについて二つの年号系統が存在したとする見解がありますが、多利思北孤王朝の絶頂期に年号系列が二つもあったとは考えにくいし、その説を裏付ける明確な説明もされていません。

これらのことから「二中歴」やその細注を無批判に信頼するのではなく、その他の九州年号表も含めて、「九州年号」については総合的な検討が必要と考えています。

また「勝山記」「日本皇帝年代記」などの後世史料は、仏教教団の思惑などが入りこみ大きく改竄・創作がされています。その事例として「検証“最後の九州王朝【大宮姫伝説】の分析”で取り上げ多元・古代史の会で報告しました(注㉑)。中・近世史の研究者からも、後世史料に安易に飛びつかないように、警鐘が出されています(馬部隆弘『椿井文書—日本最大級の偽文書』中公新書、2020年)。古田先生が指摘された「徹底的な史料批判」の精神を大事にすべきと考えています。

それでは次に、太宰府政庁は七世紀後半に作られたのでしょうか、太宰府造當年を直接裏付ける考古史料を見ていきたいと思ひます。

4) 太宰府周辺の須恵器・瓦窯について

筑紫・朝倉ではすでに4世紀から須恵器の生産が始まっています。大阪の陶邑と同じころです。そして5世紀には博多湾岸でも作られるようになり、6世紀前半には牛頸窯が操業を開始します。牛頸地区からは500基を超す窯跡が見つっています。これは大阪の陶邑につぐ西日本では最大級の窯跡群です。

そしてこの窯跡群には、**日本最古の瓦**が生産されていた「神ノ前窯」があります（場所：図4参照）。瓦の作られていた2号窯の稼働時期は6世紀末とされ、筑紫においてす

で600年以前に瓦が作られていたことが判明したのです（注②）。その後、7世紀末までに7カ所の瓦窯で瓦が焼かれていたことが判ってきました（注③）。その後7世紀後半にこの地域の瓦の生産地は北の福岡市南区にある「老司瓦窯」に移ります。ここでは“観世音寺の老司Ⅰ式”と“太宰府Ⅱ期政庁跡から出土する老司Ⅱ式”の瓦が作られていました。老司Ⅰ式の瓦が葺かれていた観世音寺は、太宰府Ⅱ期政庁と程同時期に作られていたのです。この観世音寺はⅡ期観世音寺です。その下から出土したⅠ期観世音寺には牛頸瓦窯から出土した瓦が葺かれ、その頃に掘立柱式の太宰府Ⅰ期政庁が作られたと考えられます。

太宰府とその近郊からは私寺として「般若寺」「塔原廃寺」「杉原廃寺」が出土しています（注④）。多利思北孤の使者は隋の文帝に“倭国は仏教を敬っている”と報告しています。多利思北孤の都にはすでに仏教寺院が建てられていたのでしょうか。そして牛頸の瓦窯で焼かれた瓦はⅠ期観世音寺やその他の私寺に供給されていたものと考えられます。

太宰府条坊と太宰府Ⅰ期政庁、そしてⅠ期観世音寺の位置関係、そして牛頸瓦窯の編年からそれらは同時期（6世紀後半）に建設が進められていたことわかります。隋に使者が送られた600年には太宰府に多利思北孤の都があり仏教寺院が建てられていたのです。

数々の考古史料、「二中歴細注」の検証結果などから結論は、一つの方向“Ⅰ期観世音寺は7世紀初頭の筑紫太宰府に存在した”に収束していきます。

その後、Ⅰ期観世音寺は九州王朝の滅亡寸前、7世紀末に焼けた若草伽藍の跡地にその他多くの仏像とともに移されたものと考えます。

では次に多利思北孤の墳墓と倭国のテリトリーについて見ていきたいと思ひます。

<九州初期須恵器の生産地 図11>

	四世紀			五世紀				六世紀	
形式→	TG231	TK73	TK216	ON46	TK208	TK23	TK47	MT15	TK10
朝倉	■								
筑紫野	■								
早良									
今宿				■		■	■	■	■
早良							■		
宗像							■	■	■
水城									■
牛頸									■
八女									■
豊前	■								

<日本最古の瓦 図12>



(神ノ前2号窯)

石室内には全長2.6mにも及ぶ全国最大級の金銅装頭椎大刀や、第一級の国宝である精巧な冠残欠純金の歩揺付の金銅装透彫冠、他3百数十点の遺物が出土し、うち馬具（金銅鏡板付鐙）、緑瑠璃丸玉（ガラス）など20数点が重要文化財に指定されています。

＜宮地嶽古墳金銅装頭椎大刀、復元 図15＞



七世紀前半の日本列島にこのような豪華な副葬品を持つ古墳は見受けられません。そこに埋納された全国最大級の大刀や第一級の国宝級の品々は、まさに隋の煬帝に“日出処の天子”の書簡を送った九州王朝の天子“阿每・多利思北孤”の墳墓と考えて間違いないと思います。

宮地嶽古墳の石材は対岸の相島から運ばれています。この島は阿曇族の聖地として4世紀頃から多くの積石塚古墳が築かれていました。宮地嶽古墳の石室で舞いつがれてきた筑紫舞には阿曇族の祖神とされる阿曇磯良が登場します。阿曇族の本拠地は博多湾岸の志賀海神社です。多利思北孤の次の時代に起きた白村江の戦いには阿曇比羅夫が主力となり半島に出兵しています。多利思北孤は阿曇族を背景に倭国を支配していたのではないのでしょうか。

次に多利思北孤王朝の版図を見ていきたいと思います。

2) 多利思北孤王朝の版図

イ) 倭国中枢領域

志賀海神社は全国の綿津見神社、海神社の総本社で、対馬から玄界灘沿岸の多くの神社に祀られています。

志賀海神社で春秋におこなわれる山誉種蒔漁獵祭では国歌「君が代」の原型とされる神楽歌が歌われます。そこには阿曇族発祥の地とも思える、博多湾周辺の地名が読み込まれています

(図16)。そしてこの神楽歌は、福岡県大川市にある風浪宮でも神事に歌われています。風浪宮では代々阿曇氏が

祭祀を司っていました。北の宮地嶽神社と志賀海神社、そして風浪宮は密接な関係にあったのです。津屋崎の北、鐘岬には、古代船乗りがこの岬を通り過ぎる時「志賀の皇神」に祈りを捧げた歌が万葉集7-1230番歌に収録されています。また対馬の神社には阿曇族の祖神“綿津見神”が祀られています。これらのことから北は対馬から東は玄界灘の鐘

＜君が代の舞台 図16＞



岬、そして南は風浪宮のある有明海に面する筑後川河口までが阿曇族＝多利思北孤王朝の中核領域だったと考えられます。

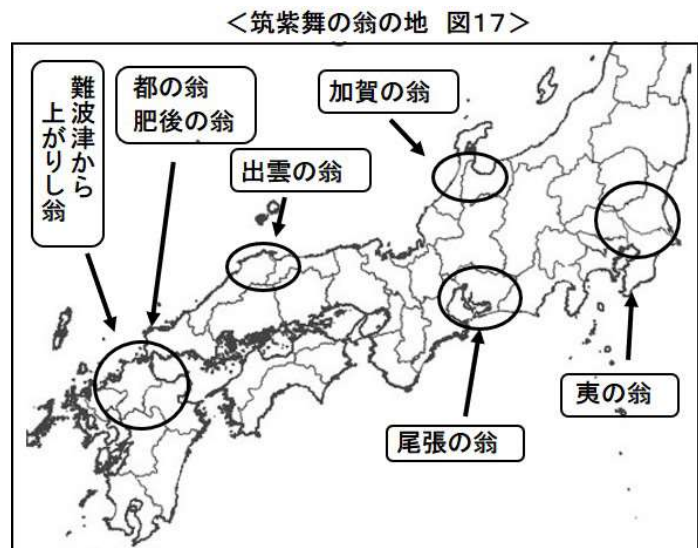
それでは、多利思北孤の勢力範囲と考えられる地域はどこだったのでしょうか。

ロ) 多利思北孤王朝の版図

筑紫舞の秘曲に「翁舞」があります。謡曲「翁」はふつう一人で舞われるのですが、筑紫舞では三人立ち、五人立ち、七人立ちと複数の翁が登場します（注⑳）。

三人立ちでは、首都太宰府の「都の翁」と九州王朝の中核をなす「肥後の翁」と「加賀の翁」と三人の翁が舞います。加賀（越の国）は古代にはヒスイ、碧玉などが出土し、博多湾岸とは交易が盛んだった地域です。白村江戦ではこの地域から阿倍比羅夫が主力軍として参加しています。肥後とともにもっとも重要な地域だったのでしょうか。

五人立ちでは「出雲の翁」と「難波津から上がりし翁」が加わります。出雲は天孫降臨の頃から倭国と繋がりがあったところです。難波津とは大阪の難波ではなく博多湾岸にありました。現在の福岡市中央区に鴻臚館という古代の海外交易施設の遺構が出土しています。古代にはそばに草香江という入り江が深く入り込み、その奥に難波津という港があったのです。今も福岡市城南区に難波池があり、『明治前期小字地名調査書』ではそこに「難波」地名が掲載されています（図3）。難波津に上陸してきた翁とは朝鮮半島南部の倭地（任那）から来た翁だと思われます。この二つは九州王朝の準中核地域と考えてよいのでしょうか。



そして七人立ちになると、「尾張の翁」「夷の翁」と太宰府からみれば遠方の翁が加わっています。尾張は丹後半島を通じて古代から筑紫と繋がっていました（注㉑）。尾張と丹後は弥生・古墳の土器、そして言葉・文化が類似し、また丹後一宮「籠神社」の祭神は天火明命で、尾張氏の祖と同一神です。倭国は日本海の交易ルートを通じ丹後半島と接触し、次に尾張へ進出したものと思えます。白村江戦では駿河の庵原君の軍1万の参戦が記されています。多利思北孤のころも強い繋がりがあったのでしょうか。夷の翁は上野国や常陸の国と考えられます。上野国から白村江戦に上毛君稚子が参戦し、常陸には肥後とともに沢山の装飾古墳がつけられ、同じ文化圏にあったと考えられます。

「筑紫舞」はまさに九州王朝の版図を象徴する舞だったのです

ハ) 白村江戦捕虜の出身地

白村江戦の行われた朝鮮半島の戦いに参加し、捕虜として帰還した白村江の帰還兵について『日本書紀』『続日本紀』に次のように記されています。

- ・持統四（六九〇）年、筑後国上陽咩郡（福岡県八女市）の住人大伴部博麻が帰国。
- ・持統十（六九六）年 伊予国風早郡（愛媛県北条市）の物部薬、肥後国皮石郡（熊本県菊池市）の壬生諸石が、唐の地で苦しんだことを慰め褒賞を与える。
- ・慶雲元（七〇四）年 讃岐国の錦部刀良、陸奥国の生王五百足、筑後国の許勢部信太形見らが遣唐使粟田真人とともに帰国。

さらに『日本霊異記』には伊予の越智直が捕えられ唐に連行されたが、同族八人とともに脱出に成功して帰国したこと、また備後国三谷郡（広島県三次市）の長官が百済での戦に参加し、百済の僧を連れて帰国したことが書かれています。

朝鮮半島派遣軍は九州王朝中枢の筑紫・肥後などの軍だけでなく、影響下にあった四国の伊予・讃岐（愛媛・香川県）、中国の備後（広島県）の兵も含め構成されていたのです。また陸奥（東北地方）兵の帰還記事は、東北地域も九州王朝の支配下にあり、兵が集められていたことを示しています。

これらの兵の出身地も多利思北孤王朝の版図に含まれてよいと考えます

それでは、畿内はどうだったのでしょうか。朝鮮での戦いが始まる直前、齐明天皇の死を理由に天智以下畿内の主力軍は帰還、備前の兵も出兵を取りやめています。この頃の北九州と畿内の関係を、発掘された古墳の形状から見ていきたいと思います。

（五）6・7世紀の天皇陵の形状について

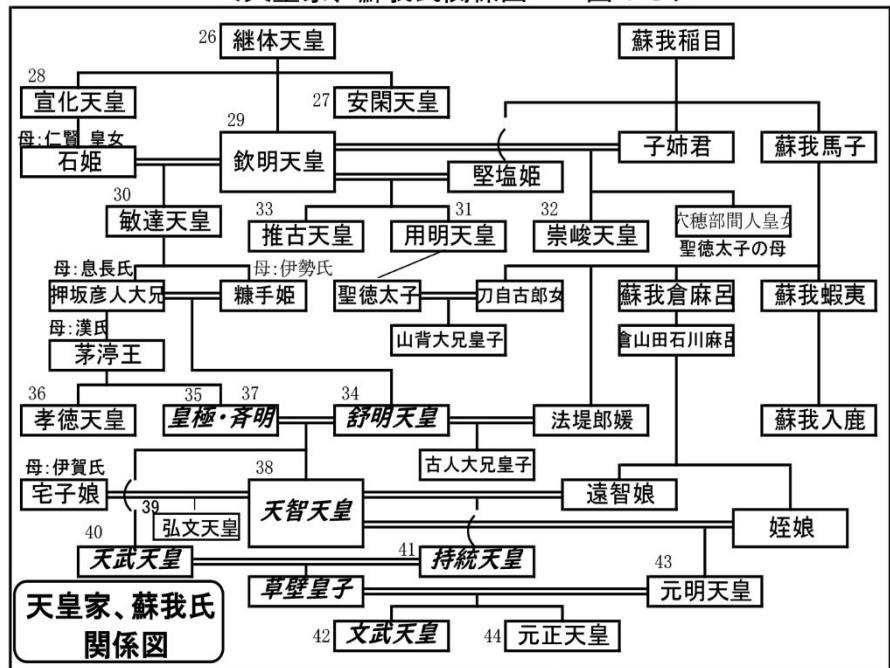
天皇陵古墳は敏達天皇までは伝統的な前方後円墳型式が採用されていましたが、蘇我氏の影響を受ける用明、崇峻、推古天皇は方墳または円墳を採用します。そして、つぎの天皇として蘇我氏の影響下でない舒明天皇が即位します。

舒明天皇の陵墓にはどのような訳か、八角墳が採用されます。そしてその後は天智・天武と対立する孝徳・弘文天皇を除き、文武天皇まで歴代の天皇が八角墳を採用します。

それまでの九州文化と関係があった前方後円墳から完全に離れたのです。その頃九州では津屋崎古墳群（四項-1）に円墳が作られていました。

八角形古墳は主に畿内で作られ、東国では群馬県に三津屋古墳など4基が出土し、西は

＜天皇家、蘇我氏関係図 図18＞



(八角墳＝舒明・斉明・天智・天武・持統・草壁・文武陵)

宝塚市の中山荘園古墳、広島県福山市の尾市1号墳で見つかっています。福山市から西の四国・九州に八角墳は出土していません。

これら古墳の形状の違いから、舒明に始まり天智-天武-文武につながる天皇は九州王朝とはまったく関係のなかった人たちだったと考えられます。天智が朝鮮半島の戦いに加わらなかったこと、持統・文武が倭国・九州王朝を滅ぼし日本国を建国、九州王朝の足跡を日本史から消し去ったことがこのことから理解できます。（図19を参照下さい）

多利思北孤の頃から、近畿天皇家は九州王朝から離れていったと考えます

【隋書倭国伝の“倭国は百済・新羅の東南水陸三千余里”について】

『隋書』冒頭の文書をもとに、この里程は隋の長里で、“多利思北孤の都は大阪・難波にあった”。また隋使の倭都への行路記事から“隋使は瀬戸内海を通り大阪湾に着き、そこにいた多利思北孤に謁見した”とする説がたてられています（注⑳）。

<大下見解>

① 「倭国伝」の冒頭記事の「里程」について：

本稿（二）－1で説明したように、冒頭記事は古い中国史書からの引用文です。里程が詳しく記された「魏志倭人伝」には短里が使われていることから水陸三千里は短里に基づいて記されたと考えます。

また同じ冒頭記事に“東西五月行、南北三月行”とあります。これも古い史書からの引用で、倭国の最大版図の頃（倭の五王時代か）の情報かと推定しています。

従って、これら文書の表現から、多利思北孤の時代の版図を推し量ることは適切ではないと考えます、

② 隋王朝の“倭国の首都”についての認識：

冒頭記事には、隋王朝が認識している倭国とは、“古の史書に記されている倭国であり、その王朝は魏から梁まで一貫して中国に相通じていた”と記されています。『日本書紀』に“近畿天皇家が中国王朝と接触した”記事はありません。「隋書」は倭国は卑弥呼から倭の五王の頃まで筑紫にあったと考えています。

③ 隋使の行路記事“「又経十余国達於海岸」の海岸は大阪”について：

隋書の記事は“陸路十余国を通過すればその先に海岸がある”と理解できます。九州から大阪へ行くには、豊前の港から船にのり瀬戸内を通り大阪湾につきます。隋書記事からその光景を読み取ることはできません。

また7世紀前半の上町台地からは渡来人の深い関係を示す史料が出土しています。上町台地は九州王朝でなく、渡来人の土地だったと考えています（注㉑）。

④ 多利思北孤はどこで裴世清とあったのか：

本稿（二）－3での説明のように、隋書の記述は“隋使は筑紫に到着し、海岸で多利思北孤の高官の迎えを受け、首都太宰府での受け入れ準備が出来るまで10日待ち、それから太宰府に向かった”と素直に解釈すべきと考えます。隋書は一貫して筑紫中心に記されており、大阪のことは一言も記されていないと理解しています。

＜天皇陵比定古墳 図19＞

歴代	天皇	即位	天皇陵古墳	形状	場所	全長	八角墳形状	備考
26	継体	507	今城塚?	前方後円墳	高槻市	190m		従来型の前方後円墳
27	安閑	531	高屋築山?	〃	古市	122m		
28	宣化	536	ミサンザイ	〃	檀原鳥屋	130m		
29	欽明	539	見瀬丸山?	〃	檀原見瀬	318m		
30	敏達	572	太子西山	〃	太子町	113m		
31	用明	585	春日向山	方墳	〃	65x60m		蘇我系の円・方墳
32	崇峻	587	倉梯岡上	円墳	桜井倉橋	35m		
33	推古	592	山田高塚	方墳	太子町	59x55m		
	忍坂彦人大兄 茅渟王		牧野古墳 平野塚穴山	円墳 方墳	馬見 香芝	48~60 18m		
34	吉備姫王 舒明	629	岩屋山? 段ノ塚	八角墳 八角墳	明日香 桜井忍坂	45m 42/105m	上八下方方墳 上八下方方墳	新しい八角墳
35	皇極	642	(齊明と同じ)					
36	孝徳	645	山田上ノ山	円墳	太子町	32m		
37	齊明	655	牽牛子塚	八角墳	明日香	32m	石敷含む	
38	天智	661	御廟野	八角墳	山科	46/70m	上円下方墳	
39	弘文	672	平松亀山	円墳	大津市	20m		
40	天武	673	野口王墓	八角墳	明日香	58m		
41	持統	686	(天武と合葬)					
	草壁		東明神	八角墳	高取	30m		
42	文武	697	中尾山	八角墳	明日香	20m		

(吉備姫王: 茅渟王妃、孝徳・皇極/齊明の母)

(文責: 大下)

(飛鳥南部の遺跡地図)



(出典: 坂 靖『蘇我氏の古代学』新泉社、2018年)

おわりに

筆者が「古田史学の会」に入会した頃、「関西例会」では飯田満磨氏らが中心となり盛んに「法隆寺移築説問題」が語られていました。この時、考古学的視点から「九州王朝」を見ていこうと、伊東義影氏が“地元奈良を中心とした遺跡の研究成果”そして「九州の古墳研究」を例会で報告されていました。毎月行われていた「史跡めぐりハイキング」では“文献を現場で確認していこう”と、リーダーの小林喜朗氏のもと全国からも会員が参加し、例会と現場、それぞれで、きわめて実証的な議論が交わされていました。

今年の古代史セミナーのテーマが「多利思北孤の時代」だったので、当時の伊東・飯田氏の論考を探し出し、また多元シンポジウムのレジュメを多元・和田事務局長に送っていただき、さらにこのシンポジウムに参加した米田・川端・古賀・大越諸氏の著書・論考を読み直し、本稿を作成しました。また「八角墳」については、小林氏に「八角墳」が集中する飛鳥南部（図19）を案内してもらい、それぞれの古墳を訪問したことを思い出しました。小林氏の「史跡めぐりハイキング」はすでに200回をこえています。石室の中に入り、実地で古墳の説明をしていただいた小林氏はじめ、多くの先輩に改めてお礼を申し上げます。

7世紀の日本は「倭国から日本国へ」交代する時代です。『日本書紀』はこの時代のことを完全に隠蔽しています。また古代史学会も頑として「書紀」中心の歴史観を改めようとしません。この時代の本当の姿をよみがえらせることは困難を極めるとは思いますが、幸い福井県水月湖の「年縞博物館」がピンポイントで縄文から弥生・古墳時代の実年代を測定する科学的手法を確立したことにより、古代史の致命的欠陥である“あやふやな年代観”を是正できる可能性が出てきました。日本の古代史研究は1990年代以降停滞している感がありますが、日本国民もいつまでも「失われた三十年」を続けることに甘んじていないと思います。豊中市での、一年間にわたる“市民との古代史についての対話（注⑳）”を通じこのことを実感しました。

「古田史学」各会の会報には先人の優れた研究成果が掲載されています。これらの研究を“賽の河原の石積み”の繰り返しとするのではなく、“研究成果の蓄積”を基に今後の研究を進めていく必要があります。このため2004年に多元の会で行われた“法隆寺移築問題”シンポジウムのような“重要問題に焦点をあてた会員の意見交換の場を持ち、問題点を討議し”その結果を全国に発信するようにすれば、次の建設的な一歩を踏み出せるのではないかと考えています。

<注記>

- ① 中小路駿逸「答えが先か根拠が先か」『季節第12号』エスエル出版会、1988年。
- ② 古田武彦『「邪馬台国」はなかった』、『失われた九州王朝』、『盗まれた神話』、朝日新聞社、1970～75年。

- ③ 大下隆司「考古出土物から見た“倭の五王”の活動領域と中枢部」古代史セミナー 2021年。
- ④ 大下隆司「検証：九州王朝の筑後遷都説」古代史セミナー 2021で補足資料として配布。
- ⑤ 門脇貞二『飛鳥・新版』日本放送協会出版協会、1977年。坂 靖一『蘇我氏の古代学』新泉社、2018年。
- ⑥ 『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅳ』37～50頁、九州歴史資料館、
- ⑦ 飯田満磨「大野城大宰府口城門出土木材について」『古代に真実を求めて10集』、明石書店、2007年。
- ⑧ 大越邦生「観世音寺草創の問題」東京古田会ニュース 179, 180, 183号. 2018年。
- ⑨ 米田良三『法隆寺は移築された』新泉社、1991年、
- ⑩ 多元シンポジウム 2004レジュメ、2004年9月4日より引用。但しシンポジウムでの討議内容は配布されたレジュメだけでは判断できないので古賀説については古田会 192・182号など、川端説については氏の『法隆寺のものさし』ミネルヴァ書房、2004年、など各氏の著書を参考にしました。
- ⑪ 古賀達也「『二中歴』細注の史料批判」『古代に真実を求めて第20集』古田史学の会編、明石書店、2017年。
- ⑫ 伊東義影「太宰府考」『古代に真実を求めて第13集』2010年。
- ⑬ 『観世音寺-遺物編Ⅰ』九州歴史資料館、2007年。
- ⑭ 飯田満磨「法隆寺移築元の追求 その二」『古代に真実を求めて第10集』2007年。
- ⑮ 正木裕「補遺 観世音寺建立と”碾磴“」古田史学会報 110号、2012年6月。大下隆司「碾磴と水碓」古田史学会報 114号、2013年2月。正木裕「観世音寺の“碾磴”について」古田史学会報 115号、2013年4月。大下隆司「“史料根拠と考古学”について」古田史学会報 117号、項目Bーハ「科学者意見の間違った紹介」、2013年8月。
- ⑯ 古賀達也「観世音寺考」古田史学会報 119号、2013年。
- ⑰ 古賀達也「九州王朝の難波天王寺建立」『古代に真実を求めて18集』2015年、
- ⑱ 岩田茂樹「法隆寺金堂四天王像の諸問題」『国宝法隆寺金堂展』奈良国立博、2008年
- ⑲ 大下隆司「“史料根拠と考古学”について—前期難波宮・九州王朝説批判」古田史学会報、2013年8月。大下隆司「古田史学“学問の方法”と“難波宮副都説”について」古田会ニュース 172号、2017年1月。大下隆司「難波宮遺構の考古発掘報告書批判」古代史セミナー 2019、2019年11月。
- ⑳ 古田武彦「わたしの学問研究の方法について」『邪馬一国の証明』ミネルヴァ書房、2019年
- ㉑ 大下隆司「古代の南九州」多元・古代史の会資料倉庫(画面12～16頁。2021年4月11日。(大下隆司「検証“最後の九州王朝【大宮姫伝説】の分析」2020年は未発表)

- ② 『神ノ前窯跡・文化財調査報告書第2集』太宰府町教育委員会、1979年。
- ③ 『牛頸月ノ浦窯跡群』大野城市文化財調査報告書39集、1993年。
- ④ 小田富士夫「太宰府の寺院跡」『太宰府の歴史3』西日本新聞、1984年。
- ⑤ 古田武彦『よみがえる九州王朝-幻の筑紫舞』ミネルヴァ書房、2014年。
- ⑥ 『丹後・東海地方のことばと文化』京丹後市教育委員会、2015年。
- ⑦ 野田利郎「倭王の都への行程記事を読む」古田史学会報158号、2020年。
- ⑧ 大下隆司「難波宮遺構の考古発掘報告書批判」古代史セミナー2019。
- ⑨ 「歴史談話会-倭人伝に描かれた倭の国々」豊中市千里文化センター公民連携事業、2021年9月～2022年8月。

< 図の出典（それぞれ一部改変） >

- 図1, 6：木戸りんご画（『「日出処の天子」は誰か』）。
- 図2：神籠石山城群：古田武彦『奪われた国家君が代』情報センター出版局、2008年。
- 図3, 4：大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』高志書院、2018年。
- 図5：西日本新聞、2019年10月22日。
- 図7：『日本の美術』421号、至文堂、2001年。
- 図8：観世音寺境内に置かれた礎礎写真（大下撮影）。
- 図9：『天工開物』東洋文庫、1985年版。
- 図10：『市民の古代第11集』新泉社、1989年。
- 図11：大下隆司「考古出土物から見た“倭の五王”の活動領域と中枢部」古代史セミナー2021。
- 図12：「神ノ前窯跡出土瓦 附 2号窯出土土器」太宰府市文化財情報、2021年8月更新。
- 図13：吉村靖徳『九州の古墳』海鳥社、2015年。
- 図14：宮地嶽神社石室写真（大下撮影）。
- 図15：頭椎大刀復元写真。宮地嶽神社提供。
- 図16, 17, 18：大下隆司・山浦純『「日出処の天子」は誰か』ミネルヴァ書房、2018年より。
- 図19地図：坂 靖『蘇我氏の古代学』新泉社、2018年。八角墳写真は朝日新聞デジタルより。